

有明海水産資源回復技術確立事業*

タイラギ等適正生息環境調査 (タイラギ稚貝移植モニタリング)

大庭元気

佐賀県では、有明3県および国と連携し、2018年度からタイラギ稚貝の放流による母貝団地の造成に取り組んでいる。本報では、2020年度に放流した種苗生産稚貝と天然稚貝の成長等の追跡調査および2021年度に行った稚貝放流の概要を報告する。

方法

1) 追跡調査

2020年度に放流したタイラギの追跡調査を行った。月に1回程度、図1に示す地点で追跡調査区画の生残率を調べた。また、定期的に殻長測定を行った。

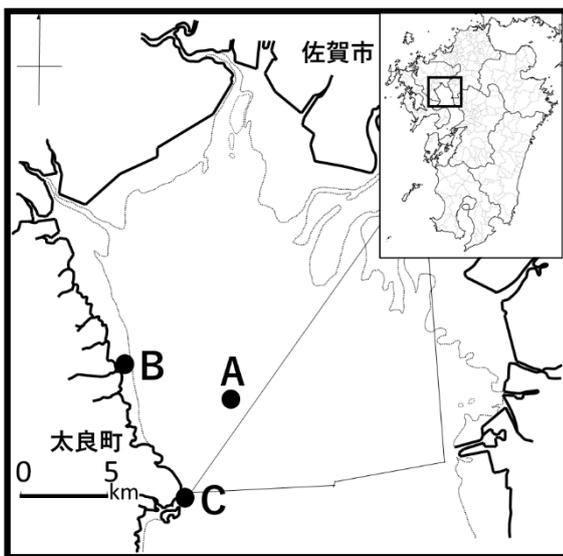


図1 放流および調査地点図

2) 稚貝放流

2021年度の放流は、2021年12月に、定点Aで実施した。放流には、水産技術研究所、または当県で種苗生産した稚貝(殻長46-61mm)を用いた。食害・散逸対策として、ネットロンネット(目合い8mm)で作成した四角形のカゴの各辺に、直径10mmの異径鉄筋を結束したもの(図2; ネットロンカゴ区)を被せた。放流数は150個体/区とし、カゴの大きさは0.85m(縦)×0.85m(横)×0.2m(高さ)とした。また、一部は直径37cm×高さ28cmの円形カゴに、粒径2m



図2 ネットロンカゴ区



図3 円形カゴ区

mのアンスラサイトを15cm厚で入れ、稚貝を30個入れた後、目合い8mmのネットロンシートで被覆する(図3; 円形カゴ区)を設けた。

なお、調査時に、ネットへの付着物や砂の堆積があった場合は、ネットの交換や付着物除去等の放流区画の維持・管理を行った。

結果

1) 追跡調査

各地点の生残率の推移を図4に示す。2021年4~7月まで沖合の地点Aでは53%、干潟のBおよびCでは100%の生残率を示した。その後、2021年8月の豪雨により大量に斃死し、8月末の調査では、生残率が沖合で27%、干潟で0%となった。

地点Aの平均殻長の推移を図5に示す。平均殻長は1月の放流時には48mmだったが、8月には145mmまで成長し、2022年2月には173mmに達した。

2) 稚貝放流

種苗生産した稚貝を中間育成後、2021年12月に、沖合の定点Aへ殻長46～61mmの稚貝690個を放流した(表1)。放流の方法は、前述のネトロンカゴ区および円形カゴ区と同様の手法で行った。

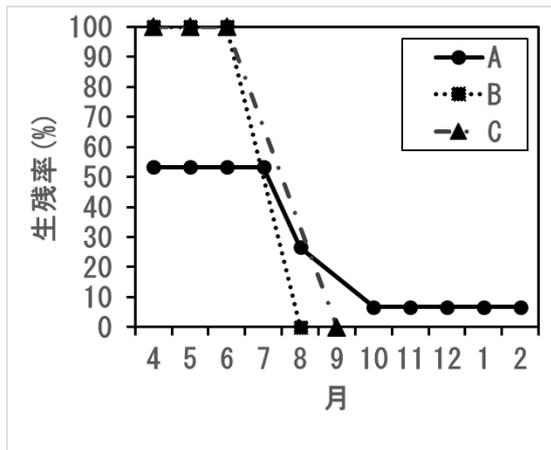


図4 各放流地の生残率の推移

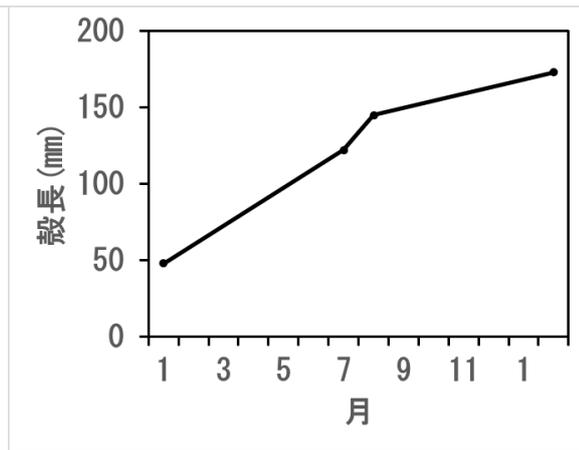


図5 放流地の平均殻長の推移

表1 稚貝放流状況

移植日	地点	種苗生産施設	個数	平均殻長 (mm)
12月28日	A	水産技術研究所	30	46
12月28日	A	有明水産振興センター	450	42
12月28日	A	有明水産振興センター	210	61